

『HIGH & LOW』に見る「いのち」の表現

鈴木 国 男

二〇二二年度文學藝術プロジェクトの一環として、川崎賢子氏の講演会が開かれ、その記録が本誌に掲載されている。宝塚歌劇の作品における「いのち」の表現についての示唆に富む考察を読み取ることができる。もともと、本号の特集テーマは「宝」を予定しており、そこからこの講演の企画が生まれたのだが、その内容に刺激を受け、昨今の情勢も踏まえて、思い切ってテーマを「命」としたという経緯もある。そこで、さらにもう一つ、比較的最近の上演作品を取り上げ、同様の考察を試みたい。

『TAKARAZUKA MUSICAL ROMANCE HIGH & LOW THE PREQUEL』は、二〇二二年八月二七日から九月二六日まで、宙組公演として宝塚大劇場、同年一〇月一五日から十一月二六日まで東京宝塚劇場にて上演された。脚本・演出は座付作者である野口幸作だが、その他に、原作・著作はH・MAX、構想は平沼紀久、渡辺啓（ともにLDH JAPAN）とされている。宝塚歌劇において小説や漫画などを原作とする作品は数多くあり、その場合、原作者名が明らかにされるのは当然だが、このような記述の例はかつてなかったと思われる。ちなみに、この作品は、いわゆる「メディアミックス」の代表的な例として報じられ、かつて2・5次元ミュージカルをめぐるそのようなことを論

じたことがあるからだろうか、筆者にもインタヴューの依頼があり、宝塚歌劇団の機関誌である『歌劇』二〇二二年九月号の、「ワールド ワイド オブ タカラヅカ」という企画記事の中にその記録が掲載された。

そのような背景があるので、この作品の成立過程と内容について簡潔に説明するのは、かなり難しい。まずは、ある新聞記事の一部を引用する。

「吸い込まれました。前のコブラを忘れるくらいに存在感はさすが。」人気グループ「EXILE」のHIROは、宝塚歌劇団宙組トップスター・真風涼帆をこうたたえた。「HIGH & LOW」のプロジェクトを手がける「LDH JAPAN」とのコラボレーションで注目される新作。粗暴さも見せながら、宝塚の世界観で昇華させ、「本家」のトップをうならせた。

宝塚大劇場（兵庫県宝塚市）で上演中の「HIGH & LOW — THE PREQUEL」（野口幸作脚本・演出）で、真風は「山王連合会」のリーダー・コブラを演じる。

「HIGH & LOW」は、二〇一五年にテレビドラマが初放送された後、映画やコミックなどで展開されてきた。敵対する五つのチームの頭文字を取って「SWORD」と呼ばれる地区で繰り広げられる、男たちの闘いと友情を描く。宝塚版は「SWORD」誕生前夜を舞台に、コブラと幼なじみのカナ（潤花）とのロマンスを絡めたオリジナルストーリーだ。

原作について、真風は「アクションシーンの迫力、疾走感のある音楽はさることながら、チームごとのストーリー性も魅力的」と話す。コブラは、EXILEの岩田剛典がドラマで演じた人気のキャラクター。「山王街二代目喧嘩屋」を名乗り、自らの拳で街を守ろうと闘う。「コブラ（の根底にある）怒りというのは、自分たちにはない部分。だけど仲間を守る、街を守るとい感情は、組を守るといものに通じることはあると思います」と読

み解く。

175センチの長身に革ジャンをまとい、岩田と同じピアスを着けた。対立する「White Rascals」のROCKY（芹香斗亜）、「RUDE BOYS」のスモーキー（桜木みなと）らも含め、ビジュアルの再現度は高い。その上で、こだわったのは「宝塚バージョンの『HIGH & LOW』を作る」と。「映像ならではのアクションシーンを、舞台上で生身の人間が、しかも男役がどう演じるのが課題」とハードルは低くない。宝塚ではあまりなじみのない素手の立ち回りを特訓。ダンスやコーラス、装置を駆使した舞台ならではの見せ方で、迫力とともに宝塚らしさも織り込んだ。「マジか」「ちげーよ（違うよ）」というセリフもあり、現代の若者を的確に演じ、原作との連続性を感じさせた。

物語の軸となるカナとのロマンスでは、若い「青さ」がまぶしい。余命半年のカナの願いをかなえるために奔走し、敵対するグループに頭を下げることもいとわれない。恋に戸惑う姿が新鮮だ。コブラを無口にさせた悲恋は原作では描かれていない。野口は「普段の真風さんのしゃべり方や仕草が魅力的。それが冗舌だった時代のコブラの魅力に重ねられている」と分析する。（以下省略。二〇二二年九月一二日毎日新聞。）

また、公演プログラムには、宝塚歌劇団理事長の木場健之氏が、次のような一文を寄せている。（宙組公演プログラム 阪急電鉄株式会社歌劇事業部 令和四年八月二七日発行 一部省略）

二〇一五年に連続ドラマとして日本テレビ系列にて初放送された「HIGH & LOW」は、二〇二〇年までにシリーズ5作が放送され、二〇一六年より公開された映画シリーズは作品数にして7作、爆発的人気を博し、音楽・コミック・ゲーム・SNS・テーマパークなどあらゆるメディアを融合させた「総合エンタテインメント・プ

ロジエクト」となっています。この壮大なシリーズの前日譚（THE PREQUEL）を新たに構想「LDH JAPAN」と宝塚歌劇のコラボレーションによりお届け致します。宝塚歌劇ならではの世界観で描く、守るべき女性・守るべき街との間で葛藤する男たちの熱い闘いと愛の物語にどうぞご期待下さい。

また、同じプログラムで、脚本・演出の野口幸作は、次のように語っている。（一部省略）

今回のプロジェクトは、ちょうど一年前、宙組の東京公演の舞台稽古を『HIGH & LOW』のクリエイティブチームH-TAXの方が観に来て下さった時から始まりました。その後の打ち合わせで早速『HIGH & LOW』のドラマのファーストシーズンの前日譚、コブラが無口になった理由にまつわる悲恋」を宝塚的なミュージカルとして上演する事が決まったのです。作品の大ファンである私はコブラの知られざる過去を知る事が出来るのかと興奮したのですが、それも束の間、よく考えたら作者は自分なのだと思い付き、プレッシャーが押し寄せました。あの超人気キャラクターの主人公コブラの知られざる過去を、勝手に創作するなど世界中の「HIGH & LOW ファン」への冒瀆なのではないかと恐れ慄き、構想にH-TAXの平沼紀之さんと渡辺啓さんに入って頂き、キャラクターの設定からプロット、台詞回しに至るまで、本家にお墨付きのもと、公式のストーリーとして制作を進めて行きましたようにご提案しました。

それから約一年間にわたるH-TAXの方々とは宝塚チームの共同作業が始まりました。

そこで感じたのは、例えるならば「宇宙のどこかに地球と似た惑星を発見した時のような嬉しい驚き」でした。お客様を楽しませる為ならどんな努力も惜しまないのはLDHも宝塚も変わらないと気付いたのです。付度なしに様々な意見を交換しながら、磨きをかけて参りました。

真風涼帆演じる主人公、山王連合会の総長コブラが、とあるきっかけで潤花演じる幼馴染の女性カナと再会し、それぞれの頭文字を取って「SWORD」と呼ばれる5つのグループ「山王連合会」「White Rascals」「鬼邪高校」「RUDE BOYS」「達磨一家」の各地区を巡って行く中でドラマは意外な展開を迎えます。

ジェームズ・キャメロン監督は『タイタニック』を映画化する際に会社の重役たちに「タイタニック号の船上で練り広げられる『ロミオとジュリエット』と説明したと言われていますが、今回の作品は、キャメロン流に言うと「SWORDの各地区」で練り広げられる『宝塚調ラブロマンス』といった趣向です。（引用終わり）

長い引用が続いたが、以上でこの壮大なメディアミックスの概要と、宝塚版成立の経緯、そして演出家の意図がある程度明らかになったのではないだろうか。『HIGH & LOW』の作品群の中で宝塚歌劇は現在までのメディアミックスの最後尾に位置するが、その内容は前日譚なのである。このような例は『スターウォーズ』の「エピソード」などに見られるが、この場合は同じ映画というメディア内での展開の順序が作品内部の時系列とは異なっているだけで、全体の構想の中しつかりと位置付けられていることは明らかである。

『HIGH & LOW』の場合、そもそも宝塚での上演企画の出発点がいつどのようなものであったかは厳密には示されず、とりあえずは野口の語る公式ストーリーを受け入れるしかないが、問題なのは、なぜ続編やスピンオフではなく「前日譚」なのかということである。その答は先行作の内容が明白に物語っている。映画版などを見ると、ほとんどの部分が激しい暴力シーンの連続であり、マッチョな男集団のせめぎ合いとアクションがその魅力といていだろう。たしかに「友情」は描かれているが、ヴァイオレンスを取り去ってしまったら、それすらも意味を持たず、作品そのものが成立しないだろう。どんなに工夫しても、これをそのまま宝塚歌劇の「世界観」に移し替えることは不可能である。加えて、宝塚の場合は、上演する組のトップスターコンビが、必ずヒーロー・ヒロインとなり、

何らかの男女関係が描かれなければならない。またミュージカルプレイである以上、主人公が無口であるという設定は（そういう例がないわけではないが）作劇上かなりの困難をもたらす。

一方で、「前日譚」である以上、すでに他のメディアにおいて展開されている作品群に、無理なくつながるような内容でなければならぬ。また、あまりに長く複雑なストーリーは、時間枠（二本立ての前物として、ほぼ百分以内）に完結することが求められる）の中で無理なく構成することが難しい。そして、従来の宝塚ファン以外の『HIGH & LOW』ファンを観客として迎え満足させることも想定しなければならぬ。そうした所与の条件を考えれば、舞台となる街を五つの地区に分け、それぞれが「SWORD」の縄張りとなっているという設定は、合理的なものと言えるだろう。

ここから本題として、宝塚版『HIGH & LOW』の検討に入りたい。底本とするのは、『Le CINO vol.226』（宝塚クリエティブーツ 二〇二二年九月二二日発売）に掲載された脚本である。メディアミックス全体を参照するのはなく、あくまでも宙組公演から読み取れる内容に対する考察とする。

冒頭、コブラがシルエットでセリ上がり、カナとの思い出を回想する台詞が録音で流れる。そして「俺たちはただ、この街を守りたかっただけだ」と語る。街を守るとはどういうことか。理屈で考えるところからない点も多く、それに関しては今後の展開の中でいくらか考えてみたいのだが、幕開きで主人公に決め台詞を言われてしまうと、ともかくそれが彼のアイデンティティの根本にあるのだと受け入れざるを得ない。その意味では実に巧妙な手法である。

次にナレーションが入る。「かつてムゲンという伝説のチームがこの地区一帯を支配していた」（チームという言葉には様々な定義があるだろうが、100台のハーレーの群れが押し寄せてくる映像により、暴走族的な集団であることが暗示される。コブラはムゲンの元メンバーであり、現在は山王連合会の総長なので、彼らはその傾向を引き継い

でいる。」

続くナレーションによれば、「その圧倒的な勢力により、かえってその一帯は統率がとれていた。だが、しかし……突如ムゲンは解散」となるが、その理由は示されない。「それまでムゲンが治めていた地域は無法地帯と変貌していく。しかし、それは新たな時代の幕あけを意味し、やがて自分たちの大切なモノを守る5つのチームが頭角を現しはじめた」「5つのチームの頭文字を取って、この一帯はSWORD地区と呼ばれるようになる。そしてそこにいるギャングたちはこう呼ばれた」[G—SWORD]

あえて極端な言い方をすれば、この街は過去も現在もマフィア的ギャングによって治安が保たれていることになる。全体を支配していた圧倒的なマフィアがなぜか解散した後、五つに分かれた地域を支配しようとするギャングたちが台頭しつつあるが、それはまだ確立しておらず、お互いの正体についての認識も十分ではない状態である（ただし、それぞれの縄張りだけは厳密に守られているようだ）。

これだけ見れば、『ゴッドファーザー』や『仁義なき戦い』と構図は同じである。しかしそれを指摘してもあまり意味はない。なぜなら、これは二一世紀のドラマ・映画・コミック・SNSの「世界」のために用意された構図であり、受け手の興味がそれ自体にあるわけではないからである。しかしながら、やはりその背景にあるのは「支配」「抗争」「暴力」なのであり、そこで展開されるコンテンツは、いかに罪がなくビジュアルなものであっても、常にその本質から切り離されることがないのだ。

だがここは宝塚歌劇の「世界」である。前出のナレーションの後、それぞれのチームが歌い踊りながら大階段を降りて来る。昔ながらの任侠スタイル、留年を繰り返す高校生、ホストまがいの白スーツ集団、不気味なスラム街の住人、そして暴走族と、それぞれ男役スターをリーダーとするチームが、それぞれの属性を反映しながらも宝塚の舞台衣装としてデザインされたコスチュームをまとい、それぞれの個性を表現する音楽と振付を披露する。

演出の野口幸作は、ショー（レビュー）作家として高い評価を得ており、『花より男子』などのミュージカルプレイにおいても、その特質を發揮しているが、ここでも見事にその手腕を見せている。第1場だけで、観客の目と耳を楽しませながら、ほとんどの出演者と役柄、全体の状況まで説明するという、歌劇のお手本と言ってもよいオープニングになっているのだ。

ところで、この作品の舞台となるのはどんな「街」なのだろうか。劇中に具体的な説明はない。だが、舞台面を見てみると、それほど大きくはない日本の地方都市らしく、海岸沿いには広い自動車道路が走り、没個性な中小のビルが立ち並んでいる。遊園地や浴衣がけて祭りを楽しむ場面もあれば、スラム街もある。豪華な女性向けクラブの建設はバブル期の雰囲気を感じさせる。そして、コブラ達の本拠地である山王街は、まさに昭レトロな下町なのである。暴走族もレディースも、普段はその住人たちに溶け込んだ、ヤンチャだが気のいい若者たちである。こういう人々には、今日滅多にお目にかかれないだろう。とはいえ、そこから世知辛い現在を照射して殺伐たる気分になるのは、もちろんこうした作品群を味わう態度ではない。

五つの地区を「支配」するグループは、それぞれまったく違う個性を持っているが、それがどのように形成されたのか、なぜ全体を支配していたムゲンを受け継ぐのが山王連合会だけなのかは明らかではない。また、お互いの存在と縄張りとは認識されているが、共通理解はまだまだ不足している。越境による小競り合いはあるものの、存在をかけた抗争というほどではない。戦国時代のように、隙を見て隣国に侵入し領地を広げようという機運も見られない。だから、「街を守るため毎日のように喧嘩をする」というのが本当なのか、実は疑わしい。要するに自己肯定のための空想的理念なのであり、「美しい国」とか「抑止力としての敵基地攻撃能力」の類のようにも思えてくる。

ただ、それだけではドラマにならないし、かといって五つの地域（チーム）が天下統一をめざして戦うというのも本来の設定と異なるので、密かに全体の支配をもくろむ苦邪組（くじゃく）という集団の存在が導入されている。陰

謀のために潜伏しているので、表立った場面は作りにくい。そこで五つのチームにそれぞれ一人ずつスパイとして潜入しているという設定にしている。こうすることによって、最初は各チームのメンバーとして演じ、やがて陰謀の場面を作ることによって少しずつドラマが進展するという作劇も巧みである。山王連合会のレディース苺美瑠狂（いちごみるく）とそれに対抗する「苦邪組七姉妹」が設定されていることにより、男性の役が圧倒的に多い作品中に娘役の出番も用意されている。

さて、喧嘩三昧と言いながら、実はパツとしない毎日を送っている山王連合会の面々が、ふとしたことから *White Rescals* が郊外の古洋館で開くパーティに潜り込むことになる。仮面で正体を隠して潜入した舞踏会で思いがけずヒーローとヒロインが出会うというのは、まさに『ロミオとジュリエット』であり、キャメロン監督の言葉を野口が意識しているのは明らかである。ここでコブラは、幼馴染のカナと再会し、ここから本来の宝塚歌劇が始まるといういいのだが、ロミオとジュリエット同様、二人にはどうしても結ばれない運命が待っている。しかし、その設定は大いに問題含みである。

かれらの年齢は明示されていないが、その造形からして「若者」であることに疑いはない。コブラの幼馴染が刑務所に入っているとされていることからしても、成人であることも確かだろう。二十代半ばといったところだろうか。コブラの職業は不詳だが、他のメンバーは山王街にある商店の息子で家業を手伝っているということになっているし、コブラもサラリーマンではないだろう（町工場の工具という風情はあるかもしれない）。

そして、カナは中学校に入る前にこの街を去り、それ以後初めてコブラと会ったのである。つまり、十年以上たったことになる。その間、カナはどうしていたかという点、「実は私の治療のために、両親が国中のいろんな病院を回ってくれたの」「もう手の施しようがないって お医者さんは言った 余命 半年……」（後半は歌 筆者注）「普通の人より進行が早いみたいで、こう見えて中はボロボロなの。だから私」「人生の終わりに やり残したことを

叶えたい 生まれ育った 大好きなこの街で！」(歌)

カナはコブラにやりたい事のリストを見せ、最初はためらっていたコブラもカナの最後の願いを叶えるべく、バイクで街をめぐり、遊園地で遊び、花火を見、祭りを楽しみ、突然体調が悪化したカナを近くの診療所に連れてゆく。その過程で、彼らは他のチームの支配地域に足を踏み入れ、とがめられたコブラは「頭を下げる」のである。はかない命と美しい献身。

ここで理屈を並べるのは、宝塚歌劇を鑑賞する態度ではない。しかし作品分析としてあえて言わなければならぬ。小学六年で進行の早い不治の病に冒され、十年以上にわたり、おそらくは裕福な両親に守られ、最高の医療を受けたものの甲斐なく、余命半年となった。その間に、美しい娘に成長した。そして、その最後の日々を送るべく懐かしい街に戻って来た。

しかし、そのかけがえない時間に彼女と共にあるのは、ずっと支えてくれた家族でも医療従事者でも、多感な青春期に出会った友人たちでもなく、十年以上離れて暮らし全く違う境遇にある幼馴染の青年なのである。運命!? ロミオとジュリエットの如く、彼らは人生の決定的瞬間に出会うべくして出会った。そして彼女はボロボロの体ながら、自由に行動し、運命の人の腕に抱かれて息を引き取り、やがては幽霊として彼の前に現れる。

一方、街を乗っ取ろうとした苦邪組の陰謀は露見し、五つのチームは協力してそれを撃退する。所与の条件からきちんとドラマを作り出し、完璧なラブストーリーを完結させた作者の才能や恐るべし。それにしても「暴力」がこれほど前面に出る宝塚歌劇作品は、かつてなかったのではないだろうか。『ロミオとジュリエット』も『ウェストサイドストーリー』も、止むに止まれぬ状況から暴力の連鎖に巻き込まれ、それでもひたむきに「生きること」「愛すること」を求めた若者たちの物語だった。たしかにこの作中で避けることのできなかつた「暴力」は出来る限り骨抜きにされてはいる。

しかし「いのち」についてはどうだろうか。難病に苦しみ、思うように行動できない状況で、必死に生きる若い人は少なからずいるだろう。そのような人々、そしてその身内や友人に対しても届けられるようなメッセージがあるのだろうか。宝塚歌劇のヒロインだったら、最後まで「私は生きたい」と言って、命を燃やすのではないだろうか。「…私ね、もうじき死ぬの…」という台詞は、作者の意図とは違った形で見る者の心に突き刺さってしまったのではないかと思われる。

宝塚歌劇には、『ベルサイユのばら』以来、漫画を原作とする作品が数多くあり、2・5次元ミュージカルの先駆けとする見方もある。もちろん、内容は様々で、歴史や文学を踏まえた格調の高いものもあれば、いわゆるコミカルな感覚を楽しむものもある。そればかりか、漫画原作ではないのにあたかもそうであるかのような雰囲気を漂わせる作品も見受けられる。それらに共通するのは、どこかに荒唐無稽ともいえる設定がなされていることであり、ファンは「漫画だから」と寛容にそれを受け止めているようだ。

たしかに、漫画というジャンルの自由度は、他のメディアに比べても高いといえるだろう。だからこそ、漫画で描かれたストーリーや人物像、特にビジュアルやアクションに関わるものは、実際の舞台で再現するのが難しい場合がしばしばある。それをどうやって実現するかという点に、2・5次元舞台の重要な要素があることは言うまでもない。想像の赴くままに描くことのできる漫画の世界を、制約の多い実際の空間と生身の肉体をもって表現することに醍醐味があるのだ。

だが、そもその背景設定の現実性、ストーリー展開の必然性、そして人物像や人間関係の構築に至るまで、「漫画だから」といつてあらゆる荒唐無稽さを認めてしまったら、作品の骨格はおろか、そこに込められたメッセージそのものが薄っぺらなものになりはすまいか。それがわかっただけでもなお、そういう世界に耽溺せざるを得ない心情や

状況に多くの人が、特に若い人が陥ってはいないかと懸念される。

それは、「実学」のみを学問とし、「職業教育」のみを教育とし、細分化された「目標」と視覚化された「成果」による「評価」に追われ、社会に出れば常に「自助」「自己責任」が前提となり、数字に表れる「エビデンス」ばかりが求められるような「世界観」を強要されて出口のない閉塞感に苛まれ、いやそのことすら意識できないような状況に追い込まれつつある若者の精神の行きつく先でないと言い切れるだろうか。